

時間と時間の内と外 ―アリストテレスとベルクソン―

運動と現実態（木山裕登）

要旨

本提題では、運動をめぐるアリストテレスの議論に照らすことで、完了・未完了というアスペクト的区別がいかに関係する時間論の基底をなしているか、それが彼の時間概念にどのような特徴をもたらしているのかを明らかにすることを目的とする。まず、主に『試論』と『アリストテレスの場所論』でのベルクソンのアリストテレス理解に基づいて、目的ないし終局状態が可能的なものとしてあるということの意味をベルクソンはどう理解するのかを吟味する。そしてこれによって、ベルクソンがどのようにして、ある特定の目的によって規定されているというキネーシス的な描像から運動を解放しようとしているのかを明らかにする。そして、そのさいに時間の内と外とを分けるものも基底的なものとして、未完了・完了の区別が前提されており、ベルクソンはこの前提を徹底することによって、キネーシスでもエネルゲイアでもない、未完了だが完全である活動状態をこそ時間の本質として表現しようとしていることを示す。